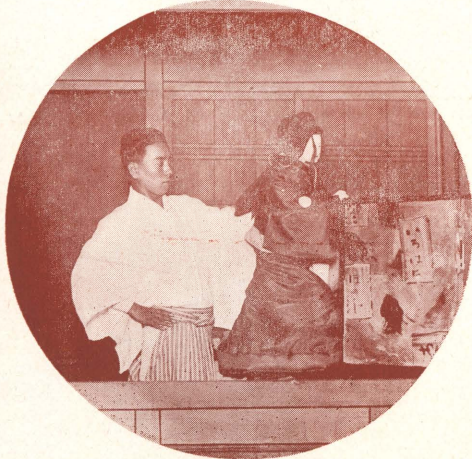


文樂座人形淨瑠璃

「菅原傳授手習鑑」

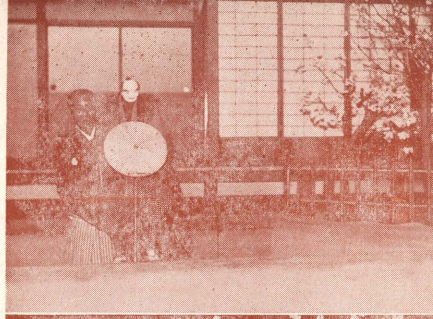
「來由木棟堂間三十三」



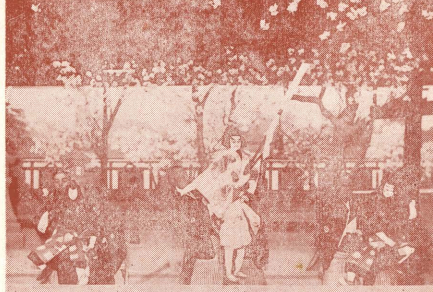
郎十紋竹桐 鳥織娘

の	月	十
座	樂	文

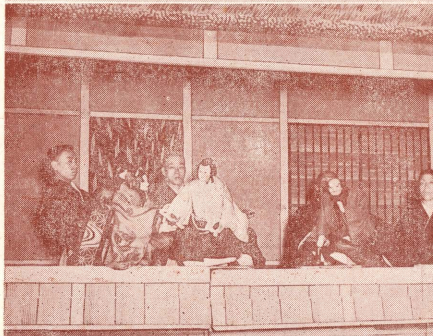
茶屋酒の段



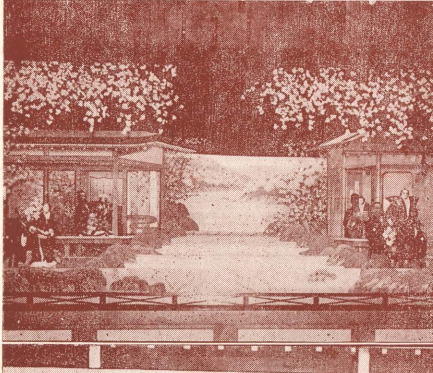
喧嘩の段



櫻丸切腹の段



妹背山婦女庭訓



心中紙屋治兵衛





紙屋治兵衛・吉田榮三

◇ 心中紙屋治兵衛 ◇

(河庄の段)

天滿に年經る。千早振。神にはあらぬ紙様と世のわに口に乗斗り。小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連繩。今は結ぶの神無月堰かれ逢れぬ身と成果あわれ逢瀬の首尾あらば夫を二人が最期目と名残りの文の云かわし毎夜くくの止かくこ、抜魂てとぼくうかく身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰。侍客で河床方と耳に入よりサア今宵と。覗く格子の奥の間に。客は頭巾の頃の。動く斗に聲聞へす。可愛く小春が父火に背けた顔のアノ瘦た事わいの。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹込で連て飛なら梅田か北野エ、知らせたい味たいと心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殻の格子に抱付あせり泣。奥には客が大欠び。思ひのある女郎衆のお伽でイヤモとんと氣がめある。門も静な端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さふサアござれと連立出れば三寶見付られじと身を忍び隠れて聞共内には知らず。なふ小春殿背からのそぶり詞の端に氣を付くれば花車が咄しの紙治さやらと心中する心と見たヤけ違ふまじ死神の付た耳へは意見も道理も入るまじこは思へども去こは愚痴のいたり先の男の無分別は恨ます一家一門そなたを恨み憎しみ萬人に死顔さらす。

◇ 文樂座十月興行 ◇